

ないものだ。ましてや、雪の降り積もる中のオーバーナイトで寒さに震えてしまった。何年かぶりのテントでこんな思いをするなんて、なんか行い悪いことをしたかと、独り言ちてしまう。テントキャンプの行動の軽快さは十分に認めるものの、やはり個人的にはキャンパーやトレイラーの方が性に合っている。

と、このままでは記事が続かない。実は、かような思いをしたテントキャンプの僅か数日前にRVショーで展示された

まるで林の中のツリーハウスで遊ぶ感覚 ス。ピーディな設営が可能 な フォールディング・ルーフトtent

今回紹介するルーフトtentはイタリアのZIFFER社がリリースするAUTOHOMEPブランドの製品である。日本への輸入はZIFFER JAPAN（ジファ・ジャパン）が行っている。担当の飯田氏に話を聞いた。

「ルーフトtentは過去にも日本に持ち込まれたことはあるんですよ。でも当時は今私たちが設定している価格の2倍くらいしてましたから、誰も彼もが買えるようなものじゃなかったし、輸入商社もワロンロットしか取らないですからね、続かなかったんです。現在、私たちは継続して輸入していますし、日本マーケット向けの仕様オーダーもしています」

欧米ではルーフトtentは古くから一般的にあって、中でも今回取材したZIFFER社は老舗ということである。本号巻頭のイントロダクションにもカラーで紹介しているの参考にしていただきたいが、1958年に製品化され、以来マーケットリーダーとして多様なルーフトtentを考案している。AUTOHOMEは同社のブランド展開。現在日本国内でも3つのシリーズで、それぞれサイズや仕様の異なる13種類のルーフトtent、そしてアクセサリ類を入手することが可能だ。

ルーフトtentの情報を入手していた。その時は、かつて訪れた米国のキャンプ場で目撃したルーフトtentを思い出したに過ぎない。フルサイズのワゴンの上にテントが張ってあって、しげしげと眺め入ったときの記憶だ。が、先日の辛い思いが引き金になって、俄然興味が湧いてきた。姿形は記憶にあるとしても、ルーフトtentでの宿泊を体験したことはない。いったいどんなものであるのか、実際の感触を知りたかった。

INA（マジヨリーナ）、COLUMBUS（コロンブス）、そしてOVERCAM P（オーバーキャンプ）の3スタイルです。サイズは大人ふたり用のカップル、大人ふたりに子供ひとり就寝できるミディアム、大人ふたりと子供ふたりのファミリー。今回の取材はマジヨリーナシリーズのトップライン・カップルを用意しました」

ルーフトtentの搭載は標準的なルーフトキャリアを介して行う。今回は、スーリー社のシステム・キャリアを4本準備した。スーリー同様の角パイプを用いた製品であれば、使用は可能という。しかし、少々気になることがある。ルーフトキャリアの場合、大方の製品の耐荷重が75kg、100kgとされているのだ。テント本体のみの重量は全く問題ないとしても、キャリアの上にルーフトtentを設営し、なおかつ人間がふたりも乗って強度的な問題は無いのだろうか。

「実際良く受ける質問なんです、それが。本社の回答では、キャリアシステムに表示された耐荷重は車輛が走行している状況まで含めてあるから、かなり安全マージンがあるそうです。だいたい3〜5倍程度の安全率は見込んであるという話です。国産のキャリアの場合はおおよそ

ルーフトtentのフロアシェルは常に平面を保つので、設営場所を選ばないのが利点だ。テントを組み上げるのはたった簡単。前後3箇所に付けられたフックを外した後にハンドルを差し込んで回すだけ。約60回回せばアッパーシェルが完全に持ち上がり設営終了。その間僅か3分。昇降のためのフォールディングアルミラダーも付属する。開口部には全て網戸が付き、換気は充分。オプションでウインターキャンプ用に外周を囲むフードやサイドオーニング、ベランダと称されるサイドtentなども用意されている。ルーフトtentの装着にはスーリーのシステムキャリアを使用した。4本はさすがに多く、3本くらいが適当か。トップヘビーになるのは仕方がないところだし、全高が30cmほど高くなるので、とくに街中の運転には注意が必要だろう

